

大学の言語教育における オンライン遠隔授業の経験と今後の可能性 —スペイン語教育のコロナ禍への対応から考える—

柿 原 武 史
禪 野 美 帆

要 旨

本稿では、2020年4月から2022年3月までの2年間の新型コロナウイルス感染拡大期に実施された関西学院大学スペイン語授業の対応や工夫を記録し、その特徴を記述した。また、それによって、大学の外国語教育運営関係者の間で情報を共有し、自然災害も含めた今後起こりうる各種の非常事態に対処する際のヒントを提供することを目的とした。特に、全学休講の決定以降のオンライン遠隔授業開始までの大学側の対応、スペイン語教育の運営に関する具体的なオンライン遠隔授業のための教材の準備や試験をはじめとする評価方法などについて詳述した。これらの取り組みを一時的なものではなく、今後の平常時の授業の改善に向けて活用するためにも、オンライン遠隔授業の効果、可能性および今後の課題について考察した。

キーワード：大学教育（University Education）、スペイン語教育（Spanish Language Education）、新型コロナウイルス感染症（Covid-19）、オンライン遠隔授業（Distance Language Teaching and Learning）、対面授業（In-person classes）

I はじめに：本稿の目的と意義

2020年春、日本のほとんどの大学は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、新学期早々予定通りに授業を開始できないという非常事態に陥った。そして、学びを止めないために、インターネットを使った遠隔授業を導入する

ための模索が行われ、わずか1ヶ月程度で様々な形態の遠隔授業が準備され、教育研究活動が再開された。それから約2年間、感染拡大の波が押し寄せるたびに、対面授業が再開されたり、遠隔授業が継続されたりといったことが繰り返された。

2022年度からは、感染状況も落ち着き、多くの大学で通常の対面授業が再開されることになった。今後も予断は許されないが、一つの区切りがついた現時点で、この2年間の遠隔授業の経験を記録し、できる限りの総括を行うことは、授業を担当した教員としての責務であると考え。この記録と総括は、今後も起こりうる様々な危機に対応する際の参考資料や指針になるだろう。また、ICT（情報通信技術）やAI（人工知能）の急速な進歩に応じて、大学教育を改善していく上でも有用な情報を提供できるだろう。

本稿では、筆者らの所属大学である関西学院大学のスペイン語教育の事例を具体例として取り上げる。まず、大学やスペイン語教育に関連する部局の対応を時系列で振り返り、次にスペイン語の遠隔授業について筆者らの取り組みを中心に記述する。そして、遠隔授業実践を中心とする今回の危機対応の課題と可能性について考察する。

II スペイン語教育に関係する部局の対応

先述したように、本稿の目的は、単に一大学のスペイン語教育の実践報告にとどまることなく、コロナ禍により強いられた遠隔授業やICTの授業への活用の経験を広く共有し、その課題や可能性を考えることにある。そのためには本稿の事例が、どのような背景や環境で実施されたものなのかを記述しておくことが必要であろう。ここでは、大規模大学におけるスペイン語教育の実情を把握するために、関西学院大学のスペイン語教育の実施状況を概観する。

1. 関西学院大学におけるスペイン語教育の実態

関西学院大学は兵庫県内3つのキャンパスに14学部を有し、2万人以上の

第1表 2021年度の関西学院大学におけるスペイン語履修者数

		文	社	経	法	商	総政	建築	人福	国際	全学*	計
春 学 期	I	107	89	93	109	100	22	13	42	69	22	644
	II	18	17	20	13	-	-		-	-		68
	III	109	93	72	97	99	-		36	6	3	512
	IV	3	20	13	20	-	-		-	-		56
計		237	219	198	239	199	22	13	78	75	25	1280
秋 学 期	I	12	6	11	13	-	-		-	-		42
	II	96	89	90	96	102	5	4	38	68	7	595
	III	16	13	19	20	-	-		-	-		68
	IV	92	90	71	92	97	-		36	4	6	488
計		216	198	191	221	199	5	4	74	72	13	1193

* 言語教育研究センターが開講している全学の学生向け選択科目は、「スペイン語初級」、「スペイン語中級」という科目名で開講されている。

出典：関西学院大学言語教育研究センター資料から筆者（柿原）作成

学生が学ぶ大規模な総合大学である。そのうち9学部でカリキュラムとしてスペイン語教育が提供されており¹⁾、総合政策学部と建築学部および国際学部を除く6学部では、1～2年次の選択必修科目として提供されている²⁾。その他、全学部の学生を対象とした選択科目のスペイン語科目が言語教育研究センターから提供されている³⁾。

近年は、毎年27～28人の教員で、合計47～48クラス（選択必修科目：39クラス、再履修や休学などで半期ずれて受講する学生向けに開講する一部学部の選択必修科目クラス：5クラス⁴⁾＋全学開講選択科目：3～4クラス）を

- 1) 文学部、社会学部、法学部、経済学部、商学部、総合政策学部、建築学部（2021年度開設）、人間福祉学部、国際学部の9学部。これらの学部では、中国語、朝鮮語、フランス語、ドイツ語、スペイン語が英語以外の言語教育科目として提供されている（総合政策学部および建築学部では、現在のところ朝鮮語は開講されていない）。各学期、スペイン語I～IVを順に履修する形態である。
- 2) 総合政策学部と建築学部は選択科目としてスペイン語I～IVの2年分相当の授業が提供され、1～4年次にスペイン語Iから順に選択可能である。国際学部は1年次に必修選択科目、2年次に選択科目として履修できる。
- 3) フランス語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、アラビア語、中国語、朝鮮語、インドネシア語、日本手話が提供されている。

開講し、各学期、約1,200人の学生が履修している（第1表）。選択必修科目は各クラス、週2回の授業（文法中心の授業と会話中心の授業）を2人の教員でペアを組んで実施している。学生の立場から見ると、週2回の授業に出席し、それぞれで合格点を得ることで当該科目の単位を取得できるということになる。

2. 2020年1月から2022年3月までのスペイン語授業対応の記録

2020年1月にWHO（世界保健機関）が新型コロナウイルスを確認してから、2022年3月までの約2年間、感染拡大防止のため、日本の多くの大学では、教室での対面授業の実施が困難になり、遠隔授業による教育の継続が求められた。本節では、この間の関西学院大学全体の対応と、それに応じたスペイン語授業の対応について、①初期対応期（2020年1月～5月末）、②同

第2表 新型コロナウイルス感染の推移と行政および関西学院大学の主な対応

	期間	政府・兵庫県・大阪府の対応	関西学院大学の対応
第1波	2020.1 ～5 末	緊急事態宣言（20.4.7～5.21）	休講（～4.20）、遠隔授業（5.6～）
第2波	2020.6 半 ～10 末		活動制限レベル策定（7.16） 活動制限レベル3に（7.20）
第3波	2020.11 初 ～2021.2 末	緊急事態宣言（21.1.14～2.28）	秋学期一部対面の方針（20.9.7） 21年度対面授業拡大の議論
第4波	2021.3 初 ～6 末	まん延防止等重点措置（4.5） 緊急事態宣言（4.25～6.20） まん延防止（6.21～7.11）	活動制限レベル4に（4.10） オンライン授業への移行（4.10）
第5波	2021.7 初 ～12 半	緊急事態宣言（7.31～9.30）	活動制限レベル4に（8.30） 活動制限レベル2に（10.15） 22年度対面授業再開方針（10.28）
第6波	2021.12 半 ～2022.4 末	まん延防止（22.1.27～3.21）	

出典：兵庫県（2021）、兵庫県（2022a）および大阪府（2022）の報道資料、関西学院大学 HP「お知らせ」の情報をもとに筆者（柿原）作成

- 4) これらのクラスは、法学部、経済学部、文学部、社会学部の学生向けに開講されている。

時双方向授業への移行期（2020年6月～2021年3月末）、③同時双方向授業本格実施期（2021年4月～2021年8月）、④対面授業再開の試行期（2021年9月～2022年3月）の4段階に分けて振り返る。なお、この間の感染拡大の推移と、大学および大学が所在する兵庫県、さらに隣接する大阪府の主な対応について第2表にまとめておく。

2.1. 初期対応期（2020年1月～5月末：2020年度春学期、第1波⁵⁾まで）

2020年1月に日本国内初の新型コロナウイルス感染者が確認されて以来、日本政府や地方自治体などが矢継ぎ早に対策を発表し、連日世界の感染者数の増加が報じられ、緊迫した状況になった。1月28日には文部科学省から事務連絡「新型コロナウイルス感染症の『指定感染症』への指定を受けた学校保健安全法上の対応について」が発出され、関西学院大学でも同日付でホームページ上で注意喚起が出され、1月31日には緊急対策本部が設置された⁶⁾。その後、海外渡航者や帰国者、課外活動を行う団体に対する注意事項が発出され、卒業式と入学式の中止が決定された⁷⁾。

授業に関しては、4月20日までのすべての授業の休講が決定され⁸⁾、その間に学内の様々な部局で議論とそれに応じた準備が行われた。4月7日に政府から「緊急事態宣言」が発出され、兵庫県や大阪府では大学に対して休業

5) マスコミ報道や政府、行政などにより用いられた感染拡大期の呼称。用語を使用する機関によって各波の期間に揺れがあるため、本稿では、兵庫県（2021）、兵庫県（2022a）および大阪府（2022）の報道資料を参考に、第1波（2020年1月～5月末）、第2波（2020年6月半ば～10月末）、第3波（2020年11月初旬～2021年2月末）、第4波（2021年3月初旬～6月末）、第5波（2021年7月初旬～12月半ば）、第6波（2021年12月半ば～2022年4月末）とする。

6) 関西学院大学ホームページ「感染症対策で緊急対策本部を設置しました」<https://www.kwansei.ac.jp/news/detail/4017>（2022年10月4日閲覧）。

7) 関西学院大学ホームページ（2020年3月2日）「【課外活動】新型コロナウイルス感染症への対応について（お知らせ）」<https://www.kwansei.ac.jp/news/detail/4429>、および（2020年3月23日）「新型コロナウイルス感染症対策の現状について（2020.03.23）」<https://www.kwansei.ac.jp/news/detail/4090>（いずれも2022年10月4日閲覧）。

8) 関西学院大学ホームページ（2020年3月23日）「2020年度春学期の授業・新入生オリエンテーションについて（2020.04.02更新）」<https://www.kwansei.ac.jp/news/detail/4091>（2022年10月4日閲覧）。

要請がなされ、関西学院大学も5月6日までキャンパスを閉鎖することを決定すると同時に、4月21日からオンライン授業を開始することを発表した⁹⁾。

スペイン語の授業は、前項で見たとおり、複数学部で開講されているため、各学部の対応を受けて外国語教育の実施主体である言語教育研究センターで実施方法が検討され、再び学部との間で協議が行われ、対応方針が決められていった。そのため、学部によって対応が異なる場合もあり、複数学部で共通の統一カリキュラム、統一の評価指標を用いて授業運営を行っているスペイン語の場合、対応に苦慮することになった。その都度、言語教育研究センターを通じて各学部と協議し、解決策を探っていくことになった。

スペイン語の専任教員および常勤講師の間では、メールにより頻繁に連絡を取り合い、学生および教員の安全を最優先に考えた上で、受講する学生にとっても、担当する教員にとっても負担が少なく、混乱が生じない対応策を検討した。また、学部間や担当教員間¹⁰⁾で授業内容や難易度になるべく差が生じないように、当面はオンデマンド授業を提供することにした。

まずは、専任教員で話し合い、オンデマンド授業で実現できる学習活動を学生を主体として列挙した。例えば、文法授業では、①解説動画を視聴する、②教科書を読み、例文を読解し、和訳や穴埋めをする、③録音音声聞いて発音する、④練習問題を解いて提出する、⑤試験を受ける、といった具合である。会話授業については、①イラストを用いたスライドショー動画を視聴する、②モデルダイアログ（質問と応答）の録音音声を聞く、③モデルダイアログに準じたダイアログを発話して、それを録音、録画したものを提出する、という活動を提示した。

ここで問題となったのは、教員間でICTに関する知識や使用経験が大きく異なるということである。特に、非常勤講師は複数の大学で授業を担当している場合が多く、本学のみで用いる特別なシステムなどの知識を要求する

9) 関西学院大学ホームページ（2020年4月20日）「保証人の皆さまへ」
<https://www.kwansei.ac.jp/news/detail/4106>（2022年10月4日閲覧）。

10) 年度や学期により異なるが、近年は文法担当教員14～16人（うち専任教員3人）、会話担当教員11人（うち常勤講師1人）の計25～27人で授業を運営している。

ことは、多大な負担をかけることになるため、最低限の知識で対応できるように配慮した。そこで、動画の作成は専任教員で分担して行うことにした。文法授業については、共通教科書に基づいて、文法事項を解説した動画を作成し、順次 YouTube にあげて配信した。会話授業も、常勤講師が同様の手法で動画を作成、公開していった。また、学生への授業内容の伝達や、課題の提出と受け取り、試験の実施は、大学が以前より使用している LMS（学習管理システム）である LUNA を使用することを推奨した¹¹⁾。

2. 2. 同時双方向授業への移行期（2020年6月～2021年3月末：第4波まで）

2020年5月21日に関西各県に出されていた緊急事態宣言が解除されて以降、感染の収束と再拡大に翻弄されることになった。さまざまな形態でなんとか遠隔での授業を再開した次の段階として、関西圏の多くの大学は、対面授業の再開へ向けた検討を開始した。関西学院大学においても、2020年度春学期は原則としてオンライン授業とすることを決定したが¹²⁾、秋学期以降の対面授業再開に向けて様々な議論や対応が行われた。7月16日には授業や課外活動などの活動を再開するための判断基準として、「新型コロナウイルス感染症拡大に対する活動制限レベル（基準）」が策定された。しかし、ほぼ同時期に感染が再拡大し、引き下げる予定であった活動制限レベルが一段階上がることになった¹³⁾。

9月7日には、関西学院大学の HP 上に掲載された学長から学生に向けたメッセージで、秋学期からオンライン授業と対面授業を組み合わせる方針が示された。その中で、「ゼミや実験科目、語学など対面での授業が重要となる科目を中心に、感染防止策を講じた上で各キャンパスの教室において対面

11) 各講師の希望によって、Google Forms など別のツールの使用も可能とした。

12) 関西学院大学教務機構（2020：2）によると、教員に対して原則としてオンデマンド授業またはオンライン同時双方向授業のいずれかの形式での遠隔授業の実施が求められた。また、評価方法に関しても、対面による定期試験を実施する一部の授業を除いて、平常評価（オンラインでの授業中試験や平常レポートを含む）に変更された。

13) 7月20日に5段階中の「レベル2」から「レベル3」に引き上げられた。

授業を実施」することが示された。しかし、語学の授業では発話練習やグループでの話し合いなどの活動が必須であることから、教員の間では、感染を防ぐことが困難であるとの懸念が持たれた。各部局での協議の結果、オンライン授業の継続も可能となり、スペイン語ではほぼすべての授業がオンライン授業を継続した。

この間、スペイン語の授業は、一部の教員がオンデマンド授業から同時双方向授業へと移行した¹⁴⁾。これには、当初本学で利用可能であった Microsoft Teams に加え、遠隔会議システム Zoom の利用が可能になったことが大きく影響している。また、秋学期の後半に対面授業を実施した教員もいた。

2.3. 同時双方向授業本格実施期（2021年4月～2021年8月：2021年度春学期）

関西学院大学では、2020年末にかけて、2021年度の授業形態が検討され、原則として対面授業を再開する方針が示された¹⁵⁾。スペイン語の専任教員もそれに合わせて準備を進め、担当教員全員に周知を行った。その際、学内の複数の部署において、基礎疾患を有していたり、家族に高齢者などが存在したりするなど、感染による重症化などのリスクが高い教員から懸念が表明され、大学側と協議を重ねた。その結果、事前に申請することで認められれば、オンライン授業を実施することが可能となった。同様に、学生も、基礎疾患や、高齢者との同居といった理由を提示した上で、申請によるオンライン受講が認められることになった。

しかし、2021年に入ると感染が拡大し、1月13日には大阪府、兵庫県ともに再び緊急事態宣言が発出され、2月28日まで延長された。その後、一旦落ち着いたものの、再び感染拡大が起きて、4月5日には「まん延防止等重点

14) 本学で2020年度にスペイン語の授業を担当した教員27人中、2020年度春学期は19人がオンデマンド授業を実施していたのに対し、秋学期は9人に減少した。一方、11人がオンライン同時双方向授業を実施、4人が途中で授業形態を変更するなどした（第1図）。

15) 大学ジャーナルオンライン（2021）は関西学院大学 Web サイトの情報を引用し、「2021年度は原則『対面授業』実施へ 関西学院大学が方針決定」と報じているが、引用元の情報は、その後の方針変更による混乱を避けるために削除されている。

措置」が大阪府と兵庫県に適用され、大学の活動制限も5段階中の上から2番目である「レベル4」に引き上げられた。これにより2021年度春学期もオンライン授業中心で始まり、4月末と7月末には緊急事態宣言が出されるなど、対面授業の再開は困難な状況が続いた。ただし、少人数授業では感染症対策を徹底した上で担当教員の判断で対面授業も実施できることとなり、制度上は対面授業とオンライン授業が併用される形となった。

この時期、スペイン語の授業を担当していた教員の多くが、オンデマンド授業からオンライン同時双方向の授業に移行した¹⁶⁾。オンライン同時双方向の場合、教室で実施していた従来の授業に準じた内容を、スライドショーを用いて実施する形態が一般的であった。ただし、ZOOMのブレイクアウトルームという機能を用いて、少人数で話し合う活動が多く授業で実施され、教室で行う授業以上にコミュニケーション活動が充実したとの声も聞かれた。一方で、オンデマンド授業を継続した教員もいたが、オンデマンド授業の内容も、世界各地で作成されたさまざまな動画教材を視聴した上で、録画課題を提出させるなど、工夫をこらしたものがあり、一概にどの授業形態が効果的であるということとはできない状況となっていた。

2.4. 対面授業再開の試行期（2021年9月～2022年3月）

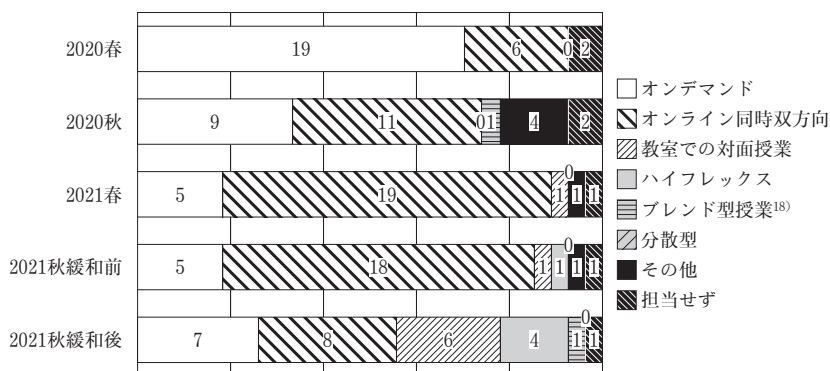
秋学期を前に再び感染が拡大し、9月末まで緊急事態宣言が継続され、8月末に大学の活動制限レベルが「レベル4」に引き上げられた。そのため、秋学期もオンライン授業と対面授業を併用する方針となった。スペイン語の授業の多くも引き続き遠隔授業が主流となったが、感染状況が落ち着いた10月に活動制限レベルが「レベル2」に引き下げられたこともあり、教室での対面授業や、教室での授業をZOOMで同時配信するハイフレックス授業へと移行する教員もいた¹⁷⁾。対面授業の場合、感染者および感染者との濃厚接

16) 2021年度にスペイン語授業を担当した教員27人中、春学期にオンライン同時双方向授業を実施した教員は19人、教室での対面授業を実施した教員は1人となり、オンデマンド授業は5人となった（第1図）。

17) 2021年度秋学期開始当初、オンライン同時双方向授業を実施した教員は27人中18人、

触者に認定された学生や、事前の申請によりオンライン受講が認められた学生への配慮も必要であり、別途オンデマンド教材を準備するなどの対応が求められた。オンライン同時双方向授業およびハイフレックス授業の場合も、授業動画の録画をクラウド上に保存し、オンデマンドで視聴できるようにした。

第1図 2020年度～2021年度のスペイン語授業の実施形態の推移 (n=27)



出典：期間内に授業を担当した全教員へのアンケート調査結果をもとに筆者（柿原）作成

3. 評価方法

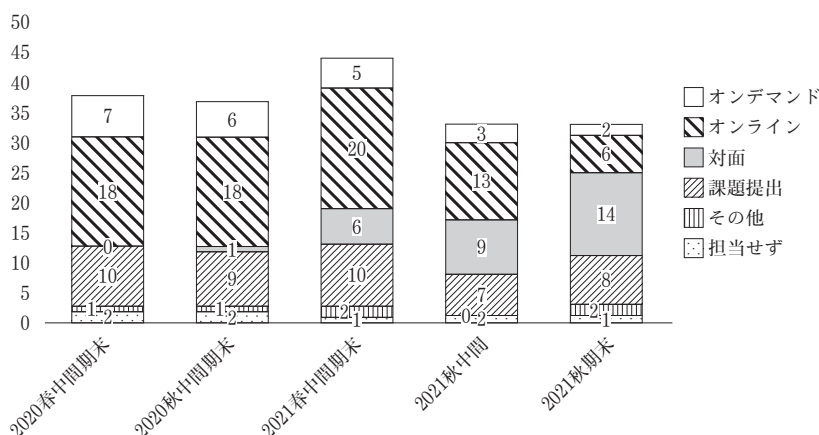
2020年度春学期の評価方法は、学内のほとんどの学部で定期試験期間に試験を実施できないため、授業中の平常評価が求められた。スペイン語は従来から授業中に複数回の試験を実施していたので、春学期の評価は、オンラインによる同時実施の試験、筆記の課題や発話の録音、録画などの提出、一定

教室で対面授業を実施した教員は2人（うち1人はオンラインでも配信するハイフレックス）、オンデマンド授業は5人、途中で授業形態を変更するなどした教員は1人だった。10月に活動制限が緩和されて以降の授業形態は、オンライン同時双方向授業8人、対面授業10人（うち4人はハイフレックス）、オンデマンド7人だった（第1図）。

- 18) ハイフレックスは教室で対面授業を実施し、それをオンラインで同時配信する授業形態で、ブレンド型学習は対面授業とオンライン授業を、教育効果を考えて組み合わせて実施するというものである。

期間内の好きな時間に受験できるオンデマンドによる試験の順で多かった¹⁹⁾。秋学期には、僅かではあるが教室での対面試験を実施した教員も現れた²⁰⁾。2021年度春学期も引き続き、オンラインでの同時実施が最も多かったが、対面で試験を実施する教員も増加した²¹⁾。オンデマンド試験は徐々に減少していった。これは、オンデマンドでは参照物を制限することができず、ある程度の暗記などが必須となる語学の初級・中級レベルの授業の学習到達度を図るという意味では、公平な試験実施が難しかったためと思われる。2021年度秋学期の後半（活動制限の緩和後）には対面での試験が最も一般的な選択肢となった²²⁾。

第2図 2020年度～2021年度のスペイン語授業の評価方法（複数回答）



出典：期間内に授業を担当した全教員へのアンケート調査結果をもとに筆者（柿原）作成

- 19) 本学で2020年度にスペイン語の授業を担当した教員27人に評価方法を複数回答が可能な選択肢式で尋ねたところ、春学期の評価方法は、決められた時間に一齐に受験するオンライン試験を実施した教員が18人、期間内の好きな時に受験できるオンデマンド試験を実施した教員が7人、課題提出が10人だった。
- 20) 2020年度秋学期は、一齐受験のオンライン試験を実施した教員が18人、オンデマンド試験を実施した教員が6人、課題提出が9人、対面試験実施が1人だった（第2図）。
- 21) 2021年度春学期は、一齐受験のオンライン試験を実施した教員が20人、オンデマンド試験が5人、対面試験が6人、課題提出が10人だった（第2図）。
- 22) 2021年度秋学期の前半（活動制限緩和前：中間試験に相当）は、一齐受験のオンライン試験を実施した教員が13人、オンデマンド試験が3人、対面試験が9人、課題提出

Ⅲ スペイン語遠隔授業の実践例

ここでは、スペイン語教育オンライン遠隔授業で用いられた教材と実践の一部を紹介する。

1. オンデマンド授業用の文法解説動画教材

2020年度春学期直前に5月6日から遠隔授業を開始する方針が決まってから、専任教員で協力・分担して動画資料を作成し、YouTubeで視聴できるようにした。この教材は、非常勤講師を含めたすべてのオンライン文法授業で使用することが想定されたため、共通教科書の内容に沿ったものとした。基本的には教科書の各課の文法事項を説明するスライドを作成し、それに音声による解説を加えたものをmp4形式の動画として保存した。単に学習者

第3図 オンデマンド授業用に作成した文法解説動画の例



出典：YouTube KG español 関学スペイン語チャンネル²³⁾

が7人、後半（活動制限緩和後：期末試験に相当）は、一斉受験のオンライン試験を実施した教員が6人、オンデマンド試験が2人、対面試験実施が14人、課題提出が8人だった（第2図）。

23) <https://www.youtube.com/channel/>（以下非公開）

第3表 2020年度オンデマンド授業用に作成した文法解説動画数

科目名	教科書の課	作成動画数
スペイン語Ⅰ	1 課から 5 課	18動画
スペイン語Ⅱ	5 課から10課	16動画
スペイン語Ⅲ	1 課から 5 課	17動画
スペイン語Ⅳ	6 課から10課	9 動画

出典：筆者（柿原）作成

が受動的に動画を視聴するのではなく、授業に参加しているのと同じ感覚で視聴できるように、随時練習問題を解く時間を設け、その解答と解説も加えた。長時間の動画の視聴は困難であることを配慮し、各動画は5分から15分程度に納めるように工夫した（第3図）。その結果、第3表のように合計60の動画を作成し、YouTube に限定公開²⁴⁾ した。

2. 同時双方向授業

関西学院大学では、Microsoft 社のオンラインコミュニケーションツールである Teams と ZOOM Video Communications 社のオンライン会議システム ZOOM を使用してオンライン同時双方向授業を行う体制が整えられた。そのため、担当教員が使い慣れている、あるいは使いやすいと感じるサービスを選択できたため、スペイン語の担当者の多くも比較的スムーズに同時双方向授業を導入することができた。とはいえ、ほぼすべての教員にとってオンライン同時双方向授業を実施するのは初めての体験であったため、操作に習熟するまでにかなりの時間を要したのも事実である。また、教員、学生と

24) 動画配信サービスの YouTube には「公開」「限定公開」「非公開」の3段階の公開設定がある。「公開」に設定すると、キーワードで検索した場合の結果に表示されたり、他の動画の関連動画として表示されたりする。そのため不特定多数のインターネットユーザーに閲覧される可能性がある。一方、「非公開」に設定すると、指定したユーザーしか視聴できない。学生ができるだけ簡単にアクセスできるようにするためには、「公開」設定にすればよいだろう。しかし大学の授業は授業料を払って在籍する学生に対して提供されるものであるという観点から考えると、不特定多数に公開することには問題がある。そこで、アドレスを知っている者のみが視聴できる「限定公開」に設定し、履修者に当該動画のアドレスを伝えることにした。

第4表 オンライン同時双方向によるスペイン語授業の一例

時間	00分～	10分～	30分～	60分～	100分
内容	授業開始 出席確認	復習	文法解説	練習問題・グループ活動	授業終了 課題・小テスト
使用機器・ アプリ等	Forms	Quizlet	PowerPoint	ブレイクアウトルーム、 Quizlet Live など	LUNA OneDrive
	←授業中常時 ZOOM によるオンライン接続→ 終了後、録画を OneDrive で共有				

出典：筆者（柿原）作成

もに基本的には自宅からインターネットに接続することになったため、それぞれの機器の性能や通信環境に左右されることになった²⁵⁾。

多くの教員は、ZOOM または Teams で同時双方向授業を実施し、課題の提出を LUNA や Microsoft OneDrive などを使用して行った。スペイン語授業の一例として、ここでは筆者（柿原）が2021年度春学期に実施したオンライン同時双方向授業の大まかな流れを示す（第4表）。授業開始と同時に、Microsoft Forms に作成した出席確認フォームのリンクを公開し、出席者に必要事項を記入させる。その際、授業に関する質問やコメントも受け付けた。その後、前回授業で出された質問を紹介しながら解説し、Quizlet による語彙クイズを実施する。次に、PowerPoint スライドを使用して、その日に扱う文法事項や表現を解説する。その際、順次学生を指名して、質問に声を出して返答させた。そうすることで、緊張感を持って授業に参加できるようにした。その後、ZOOM のブレイクアウトルームで3人程度のグループに分かれて、会話練習などをする。語彙など暗記する必要があるものは、Quizlet Live を使用して、ゲーム感覚で楽しく学習できるようにした。これらは学生同士の交流ができて、かつ、クラス内での連帯感を感じられ好評であった。

25) コロナ禍で全国的に急遽在宅勤務やオンラン授業が実施されることになったため、パソコンや Wi-Fi ルーター、高速通信サービスの需要が高まり、品薄や工事の遅れが生じ、一部の教員は、同時双方向授業の実施が困難な状況が長引き、オンデマンド授業を長期間にわたって継続せざるを得なかった。また、学生側にも、家庭内で複数のパソコンが必要になったり、ネット接続を共有する必要に迫られたため、同時双方向授業に継続的に参加するのが困難な事例も見られた。

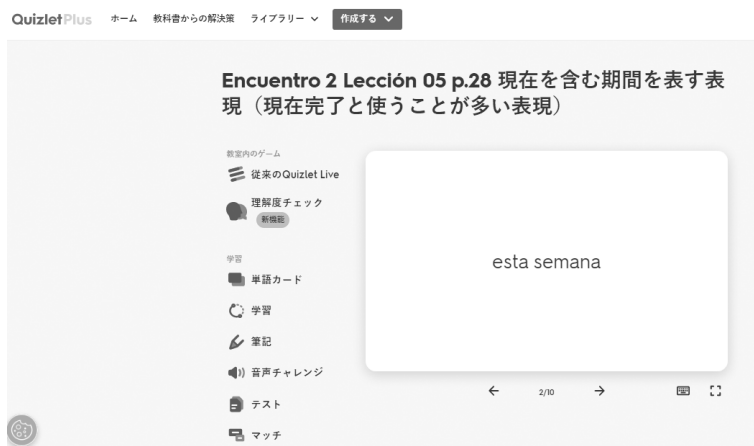
授業終了時には、その日に扱った内容に基づく小テスト形式の課題を LUNA に掲載し、次回授業の前日までに提出することとした。受験時間、受験可能回数を制限することで、不正をできるだけ減らすようにしたが、教室での小テストよりも概ね平均点が高くなる傾向があり、参照物を制限することは完全にはできなかったようだ。

3. その他のアプリケーションの活用

前節でも触れたように、オンライン授業では教室でともに学ぶことができないため、学生同士の交流が難しい。また、自宅でコンピュータの画面を見ていると、受け身な学習になりがちである。そこで、スペイン語の授業では Quizlet などのオンライン学習ツールや、動詞活用などの提示を行うソフトウェアを利用した教員もいた。

筆者（柿原）は Quizlet の有料サービスを用い、教科書の学習内容に準じた語彙リスト、動詞の活用や例文を日本語訳とともに提示した学習カードを

第4図 Quizlet の学習カードの例



出典：Quizlet 教員画面²⁶⁾

26) <https://quizlet.com/jp/267934300/>

作成し、学生が教室外で自身のスマートフォンで自習できるようにした（第4図）。また、Quizlet Live という機能を利用すれば、授業中に学生が同時にチーム対抗の語彙クイズゲームに参加でき、他の学生と一緒に授業に参加しているという連帯感や臨場感を味える環境を提供することができた。

また、スペイン語授業を担当する教員の何人かは、筆者（柿原）が参加するプロジェクトチームが独自に開発した動詞変化型提示ツール²⁷⁾を用いた。これは、動詞の活用形などを予め Excel ファイルに入力しておけば、様々な形式で表示することができるというものである（第5図）。例えば、活用表として提示し、一部の活用形を隠して学習者に答えさせたり、主語や時制をランダムで提示して、学習者にそれに対応する動詞の活用形を答えさせるといったことができる。スペイン語を学習する際には、動詞の活用形を覚えることは必須であるが、単調な暗記作業に陥りがちである。そのため、学習者が楽しく声に出しながら覚えていけるこうしたツールを使用することは、授業を活性化するのに効果的といえる（Kakihara and Kamiya 2018）。また、オンライン同時双方向授業では黒板代わりに画面共有機能を使う事が多いが、一度入力しておけば、瞬時にさまざまな動詞や活用形を提示できるため、教員の授業準備の作業を軽減する上でも役立った。

第5図 動詞変化型提示ツール



出典：筆者（柿原）作成

27) <http://www.oit.ac.jp/ip/~kamiya/spa/index.html>

Ⅳ まとめと危機対応への今後の課題

ここまで記述してきたように、2020年度以降、コロナ禍において、関西学院大学のスペイン語担当の教員は、学生に良質な授業を提供しつづけるために、様々な対応と工夫を重ねてきた。すなわち、共通教科書の内容に即した動画の作成、オンデマンド授業や、学生に出す課題での動画の使用、TeamsやZoomといったプラットフォームを利用した同時双方向授業の実施、Quizletのような語彙や動詞活用の暗記にゲーム性を持たせたツールの開発と利用などである。

関西学院大学におけるスペイン語授業運営の強みとしては、専任教員が全クラスの授業をコーディネートしているため、非常勤講師を含めた全学部全クラスの担当教員間で情報が共有されていることである。そのため、新たな情報やツールなどは、一教員の工夫で終わることはない。

コロナ禍においては、こうした全学部での運営を強みとすることができた。今後、なんらかの危機が大学教育の現場に降りかかるかもしれないが、今回の危機への対応は、今後の危機への備えとなったといえよう。

一方で、教員や学生の通信環境の不備や通信機材の不足などは、スペイン語の教員には解決できない問題であることもわかった。また、通常の対面授業が実施できないような非常事態が生じてから、遠隔授業を開始するまでには、大変な労力と時間を要することも明らかになった。今後の危機に備えるために、平常時にそろえられる機材などは可能な限り準備しておき、即時に使用できる体制を整えておくことが重要である。関西学院大学では、学生にWi-Fi ルーターやパソコンの貸与を行なったが、教員には行っていない。非常勤講師を含めた教員の自宅における通信環境の充実が求められるが、そのための経済的補助は大学レベルで検討すべき課題である。スペイン語全体の運営としては、2020年度に、スペイン語共同研究室²⁸⁾に、以前から備わって

28) 関西学院大学では、すべての語種の共同研究室がある。共同研究室の使用形態は語種により著しく異なる。スペイン語では、非常勤講師を含めたスペイン語担当教員が教

いるパソコン以外に、マイクとウェブカメラを設置した。万が一教員が自宅で動画作成や同時双方向授業ができない場合でも、共同研究室でできるようにするためである。

関西学院大学では、2022年4月からは対面授業が基本となった。ただし、授業回数の半分までは、オンライン授業とすることも許可された。スペイン語では全体として、やむを得ない場合（例えば、教員自身が濃厚接触者になった場合など）以外は対面で授業を行うこととした。2022年7月現在、新型コロナウイルス感染症は再び拡大しつつある。仮に再びオンライン授業が基本になったとしても、これまでの蓄積によって、乗り切れることは可能である。一方で、今後、コロナ禍が終息した場合においても、コロナ禍で作成した動画やツールは対面授業で有効に利用していくべきである。すなわち、筆者らは、コロナ禍での経験を無駄にしないためにも、本稿で詳述した非常時に得られた知識や知恵を、平常時の教育活動をより充実させるために活用していくところこそが重要だと考えるのである。

（筆者（柿原・禪野）は関西学院大学商学部教授）

引用文献

- 大阪府（2022）「大阪府における新型コロナウイルス感染症陽性者の報告状況2022年第21週〔5月23日～5月29日〕までの集計」『新型コロナウイルス感染症』webサイト
<http://www.iph.pref.osaka.jp/infection/disease/corona.html>（2022.10.4 閲覧）
- 関西学院大学教務機構（2020）「コロナウィルス感染症対策のための授業実施ガイドライン」（2020年6月2日更新）
- 大学ジャーナルオンライン（2021）「2021年度は原則「対面授業」実施へ 関西学院大学が方針決定」
<https://univ-journal.jp/67483/#:~:text=%E9%96%A2%E8%A5%BF%E5%AD%A6%E9%99%A2%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E3%81%AF%E3%80%812021,%E3%81%A7%E6%8E%88%E6%A5%AD%E3%82%92%E5%AE%9F%E6%96%BD%E3%81%99%E3%82%8B%E3%80%82>（2022.10.4 閲覧）
- 兵庫県（2021）「新型コロナウイルス感染症患者の発生状況」『新型コロナウイルス感染症対策本部会議にかかる知事記者会見（2021年4月9日（金曜日））』
https://web.pref.hyogo.lg.jp/governor/documents/g_kaiken20210409_02_1.pdf（2022.10.4 閲覧）

材作成やミーティングを行えるようにしている。

兵庫県（2022a）「県内の患者の状況」『新型コロナウイルス感染症対策本部会議にかかる知事記者会見（2022年4月25日（月曜日））』Web サイト

https://web.pref.hyogo.lg.jp/governor/documents/g_kaiken2022042501.pdf（2022.10.4 閲覧）

兵庫県（2022b）「新型コロナウイルス感染症に係る兵庫県対処方針（令和4年5月30日改定）」

<https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk03/taisho/coronataishohoushin0413.html>（2022.9.6 閲覧）

KAKIHARA, Takeshi and KAMIYA, Kenichi (2018) “The Use of Database in the Conventional Classrooms of Spanish” 5th WorldCALL Conference 2018, Concepción, Chile. Program Book Guide WorldCALL, p. 216.